

中国の戦地で

工藤 源次郎

市民文集「私の戦争体験」の企画を知り、私も書き残して置きたいと思ったが、10 数年来一進一退の病気療養中の身で、原稿用紙のマス目に文字を埋めていくことが困難で、ためらっていたところ戦地でひそかに書き溜めていた私の若き日の文を、知人が清書してくれるというのでお願いすることにした。

これは、戦場で戦闘が無い僅かな時間に少しずつ書きためておいたもので、日本内地に帰還するときトランクの底を二重にして持ち帰った。しかし、房州海岸で終戦を迎えたとき大部分を焼き捨て、現在 1 冊だけ残ったものである。

次の文は、札幌市月寒にある第二十五連隊の兵営から転属するところから始まる。

一 上陸の日まで

遂に来るべきものが来た。ともすれば昂奮にかられる感情を努めて冷静に還そうと努力した。近親者宛に幾通かの電報を打った。翌日は秋晴れの空に雲が浮いて気持ちのよい日であった。落ち葉の激しいポプラの木々の下に面会人が幾百人もつめかけていた。一升瓶を高くさし上げてバンザイを叫ぶ一群れ、物静かに語り合う若い二人も見えた。熱狂的な征途への感激も、この頃はまだ体内に燃えて外部には現れないのだ。集団の場合にはその興奮や感激は奔流の如く烈しいものがあるが、ごく近親者のみの歓送の場合は、はれやらぬ一抹の淋しい雰囲気包まれているのである。

昼近く弟の来訪があった。俺が入隊した当初も、この冬も全く逢う機会のなかった弟。あまりの懐かしさに暫く声も出ず、互いの顔を見合していた。一体何から話してよいのやら、……父上も一緒に来られたが事業の打合せのために明朝あたり来隊するとのこと。老いた父の姿が醜に浮かぶ。新興美笛の話、俺とて約 1 か年近く暮らした山峡。あの人もかの人も召されて大陸に征った……。

翌朝から新しい戎衣*1 に着替えた。被服返納や私物整理等で騒がしい午前中を過ごした。やれやれと思っているところに母と妹の来訪があった。母の姿をみて言葉に先立って目頭が熱くなった。母もこの征途を祝ってくれた。妹は赤ちゃんを背負って来た。妹は母になったのだ。母はこまごまと食べ物や飲み物等に注意してくれた。如何なる別離も言いたい事を十分に語れる人はないだろう。言いそびれた言葉こそ、大切な言葉ではあるまいか。言葉少なく幾時間が過ぎた。親しい人々の傍らにただで、むしように楽しかった。

母たちを見送って暫くして父の来訪があった。夕飯を食いかけていたが、すぐに飛び出した。面会所前に立つ父の姿はあまりにも痛ましかった。皮膚も手も荒れて、その苦労が偲ばれ、泣けて来そうだった。「大いにやって来い。若い者は是非一度は行ってみるべき土地だ……家の事は心配無用。いくら老いてもまだ大丈夫。お前の還ってくる日までには昔の「工藤」の家にしてみせる……」力強く語った父の目にもなぜか露の光るものがあった。父は日露戦役に従軍した体験を持っていて、こまごまと大陸の特徴や生活を、語ってくれた。この日ほど父親の有難さを感じたことはなかった。

われ征かば生活窮すると知りあつつ

父は誉れぞと強く言ひ給へり

今日も宮庭に沢山の人が名残を惜しんでいた。父の姿が宮門から見えなくなるまで、泣きたい気持ちで見送った。

（軍装を整えた五百有余の兵士は、万歳のどよめきの中、札幌駅を出発。やがて上野駅に着く）……省線のガード下を通過して兵隊の足は上野公園に向かった。冬支度の俺たちは額に汗しながら歩いた。東京の通りは迷路の如き感があった。東大赤門前を通り過ぎ後樂園スタジアム前を通り、さらに九段へと抜けた。空を衝くような大鳥居をくぐって「征人」たちは黙々と玉砂利を踏んで拝殿に近づいた。沢山のお上りさんらしい人、きっと遺族であろう。この人達に「吾子」に似た我々の姿が如何に映ったであろう。すでに俺達に向かって合掌している老婆さえいるではないか。

入京 2 日目の朝は勇壮な軍楽隊のドラムに起こされた。来る紀元二千六百年の記念観兵式に備えて、起床 1 時間前からやっているのだった。（帝都での 8 日間は宮城前広場に行ったり後樂園でピストン堀口のボクシングを見たり、ニコライ堂の円い屋根を眺めたりこれが見納め……との思いで過ごす）

東京での最後の夜、宵の中から小雨が降っていた。21 時半起床、半蔵門より出で、皇居を拝し、「至誠奉公」を誓い深夜の都大路を品川へと進んだ。沖合に古い貨物船が幾隻か黒煙を吐いていた。征人を満載したハシケが岸を離れる毎に歓送のどよめきが起きた。貨物船のタラップを昇り、鉄錆の甲板から追いこまれた処は、暗くて天井が低く三方がさびた鉄板で囲まれた船倉であった。窓一つなく、甲板に 10 坪程の起重機昇降用の穴があり、それが唯一の採光窓であった。高くもない天井を更に上下二段に区切り、兵隊の居室にしていたから頭がつかえるのであった。機関の音が同じ調子で絶えず伝わってくる。甲板に出てみるとそこはまだ瀬戸内海だった。磯舟が「万歳」を叫んで遠ざかってゆく。この夜船は関門海峡を通った。甲板に出た兵隊は、これがお国の見納めと万感胸に迫って、息をつめ身じろぎもせず、舷側に肩を並べて遠ざかりゆく祖国の山容に見入っていた。

一夜過ぎて明け放たれた朝の海、そこには祖国はすでに見えず、涯なく蒼い玄海の海があるばかりであった。甲板には兵隊が大勢集まっていて起重機の上に上っている者もいた。そして祖国の方角にじっと見入っていた。やがて誰歌うとなく「暁に祈る」の歌声が起り、期せずして甲板を揺るがす合唱となった。

「あゝ堂々の輸送船　さらば祖国よ栄えあれ、遥かに拝む宮城の空に誓ったこの決意」胸を衝くこの寂寥と感傷を如何にせん……涙ぐみながら祖国に届けとばかりに、声の限り歌い続けたのだった。

昼夜の区別なく裸の電球が錆びた天井に光っていた。船の生活は今日が 3 日目。船倉には汗臭い体臭が充満していた。船は玄海から黄海に入ったのだろう、気のせいか海水の色が変わって来た。船員の話しによるとこの船に 2 か月前、或る特科の兵を満載して征航したという。長い航海の為に軍馬が 5 頭も病死し、南支那海に水葬されたとのこと。その馬がいじらしく哀れに思われた。俺たちの居る船倉がその馬の死んだ船倉だったのだ。今は 10 月下旬だから 2 か月前といえは 8 月、さぞかし苦しかったであろう。

これが海水かと疑われる程黄色の海になった。その翌日の夕方、水平線の彼方に山ではない陸地が見えてきた。近づくにつれて日本の陸とは全然異なった赤茶色をした陸地が見えてきた。いよいよ大陸に来たのだ。

黄海唯一の良港だそうだが、潮の干満を利用しなければ入港できないという。港外には大

小の船が数えきれぬ程停泊している。上陸は明朝 5 時半に決まった。

俺は荷物搭載掛として一番先に小型汽船に縄梯子で乗り移った。起重機が幾十回となく頭の上を昇降した。しらじらと夜の明ける頃船は舳を 180 度転回して河を遡行し始めた。

小さなジャンク*2 が巧みに帆を操って下ってゆく。蛋民船*3 が幾十となく岸に繋がっている。泥で造った低く崩れた家屋が建ち並んでいた。どの壁にも「任丹」「老篤目薬」の白い大文字が書かれてあった。2 時間程後、我々の船は投錨する。不完全な栈橋から幾日かぶりかで大地に降り立つ。俺は 2、3 度足踏みをした。大地の感触が足裏に感じるようだった。

やがて俺たちは開封（カイフォン）に向かう貨車上の人となった。港の方を見ると病院船らしい船が浮かんでいた、

それはやはり病院船であった。祖国へ傷兵を運ぶその中の一隻であったのだ。日の丸の旗の波に送られ進発の感激に眸を輝かせ、新しき限りなき希望に胸をふくらませて出征した多くの戦友の中に、幾人が 1 か月も経ぬ中にこの病院船の厄介になり、瓦石となって故国の土を踏んだのだったか。—— 果たしてこの日誰がその運命を予想するであろうか。恐らく神とて知る由もあるまい。

昭和 16 年 5 月 11 日、中原会戦参加に先だって脱稿す。

二 弟妹に告げむ

余、征地に至りてより春秋移り、二度目の晩秋を中原に迎ふ。

今次の河南進攻作戦に濁流の大黄河を敵前渡河し、かの蒋介石ライン*4 を撃破、南岸地区に聖戦の意義を貫徹せしむべく、微力ながらも自我の総てを賭して健闘し、はや 3 か月を閲せんとす。

現在、頑敵を指呼の間に対峙し、明け暮れ彼我の銃声こだます。硝煙漂ふ文字通りの最前線の塹壕生活の寸暇をさきて、愛しき弟妹に告げむ。

「安ぜよ、余いまだ健在なりせば」今次の戦況はすでに御身らに熟知の筈。中原会戦に比して余らが体得したる激烈なる戦闘は、やがて来たらむ「還る日」の良き語り草と誇り居りぬ。されど戦闘は幾人かの生命を必ず奪ひ去る。戦友の生命ばかりではない、余の明日の命を果たして誰が保証するであろうか。

今日、この最前線にて遥かなる北国を偲ぶ。

雪がチラチラと見え、戦野を白銀の野と化し、星も無い夜の寒々とした静寂を破る彼我の銃砲声は、歩哨の神経を更に刺激する。

三寒四温といふ大陸特有の気温は、明くれば眼前に遺棄された敵兵の屍に積もる白雪をも溶かす柔らかき日和の訪れとなるのである。明くれば、余らの耳にするは只、彼我の銃声のみ。

時折り夜空に雁が音の渡るを見送る。この静寂な戦場生活には馴れたりとは言ひながら絶えず郷愁に駆り立てられるのである。激闘の後の静寂……空虚な心の片隅に芽生えし望郷の翳に涙ぐむは余一人ではあるまい。

落ち着く暇なく転戦また転戦に疲れた体を横たへば、屋根を洩る月光に濡れ結ぶ夢にも故郷の数々が甦へるのである。10 月の或る日思ひがけぬ故郷からの便りが来た。あの時の喜びは忘れられぬ。一葉のはがきとは言へ、明日の生命をも計り知れぬ兵隊にとっては、力強い激励であろう。銃後にある弟妹よ、前線に思ひを致せよ。そこには御国の為に雄々しく戦ふ

幾百万の兵隊の在る事を忘れてはならぬ。

余一人ばかりの事を愁ふ勿れ。祖国を遠く離れて病む多くの兵隊たちの事も考へよ。雄々しく散った多くの戦友を思へば、此の身は武運の神の加護なるか、未だ傷なく銃執りて誓ひの言葉も空しく生き残りて、なお幾百里敵地を征く。

昨日の戦闘に又幾人もの戦友が散った。隊長も雄々しく散華した。その激戦の後にくる夕闇の中に茶毘の煙が炎がたちこめる。戦闘は俺たちの生命を保障しない。今日の命は果たして明日の命か？しかし誰もが此の生命の危惧を超越して征地をゆくのである。やはり俺の身体の中にも、愛国の血潮がたぎってゐるのだ。

今は姿なき戦友を胸に抱きつつ、明日も又咲きほけた綿畑の中を前進、あの街まで骨となっても必ず入城してみせるぞ。いとしき弟妹たちよ。

御身らの日毎待たる余、今河南の地にはかなくなりて、数々の手柄を待たむに由なく、再び相見る日の無くなろうとも悲しむまい。斃るるも生くるも此れ天命、己が職を尽くして戦場に散るは男子の本懐ならんや。

昭和 17 年 12 月 23 日、河南省、大黄河右岸車站霸王城高地一〇三陣地、橋梁警備中間分哨々舎にて記す。

(くどう げんじろう 大正 7 年生まれ)

***1 戎衣** ラシャの衣服

***2 ジャンク** 中国やその周辺特有の船の総称。

***3 蛋民船** 水上生活民の船のこと。中国南部の大河川や沿岸地方に多くの水上生活者がいて、漁業、水運などに従事していた。

***4 蒋介石ライン** 蒋介石は、中華民国国民政府の総統。北伐を完成したが、浙江財閥と提携して反共の態度に固執した。第二次大戦後、中共との内戦に敗れ、中華民国政府を台湾に移した。「蒋介石ライン」は、北伐ルートのことか。